

令和3年度 奈良市立明治幼稚園 研究実践概要

園長名 北村 真由美
全園児数 16名

1. 研究主題 豊かな心をもち生き生きと主体的に活動する幼児の育成
～子どもが自ら遊びはじめるための環境・援助の工夫～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

少子化や核家族化が進み、生活経験や人との関わりに個人差が大きい。また、少人数ということもあり、自己主張することが弱いように感じる。そこで、「こんなことがやりたい」「これ使ってみたらどうなるのか」「この先はどうなるのか」等、様々な「ひと・もの・こと」との関わりを通して、遊びや生活を広げ、人と関わる喜びや思いやりの気持ちを育てていくとともに、生き生きと主体的に活動する子どもを育成していきたいと考え研究主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもを取り巻く様々な環境と関わる中で、感動体験を積み重ね、心豊かに生き生きと生活しようとする力を育てるとともに、身近な環境や人々と関わり、友達と一緒に主体的に遊ぶための保育内容や環境構成・援助を考える。

②研究の重点

- ・研究主題について共通理解をし、「奈良市こども園カリキュラム」をもとに、日々の保育の中で実践する。
- ・子ども一人一人が主体的に意欲をもって行動し楽しめるような環境構成や援助の在り方を探る。
- ・地域の方々や保護者の方との連携を深め、関わりの中で多様な経験ができるよう、保育内容の充実を図る。

③活動の方法

~~~~~ 援助と環境の工夫 \_\_\_\_\_ 主体的に遊んでいる姿

#### 【4才児】『なんかフワフワしてる!』

- 泥の感触を楽しみながら、感触の違いや色の違いの不思議さに気付く。
- 気の合う友達と一緒に泥遊びを楽しむ。

5歳児が園庭に大きな手づくりプールをつくって遊んでいた。しばらくすると、プールの底から水が漏れ出してきたことで、園庭に水が流れ出し、あちらこちらで水たまりができてはじめていた。

以前、保育室で読んだ絵本『どろんこおそうじ』を思い出し、「ばばあちゃんみたい。」と泥団子をつくり始めたA児。B児や他の幼児も集まり、友達同士で絵本のセリフの「はい、どうぞ。」を言い合いながら、泥団子づくりを楽しんだ。



しばらく楽しんだ後、流れ出した水が園庭の端まで流れ、そこにできた泥を使って泥団子をつくっていたB児が、「なんかフワフワしている。」と言い、続けてA児も、「さっきの泥と違う気がする。」と言った。2人の話を近くで聞いていたC児も、「色が違うからじゃない。」と言った。

「どうしてこの泥はフワフワしているんだろう」と保育者が疑問を投げかけると、「プールの近くの土は固い砂で、ここの砂は茶色いからフワフワ。」「向こうの土は茶色でこっちは土はオレンジみたい。」とそれぞれ自分の思いを話した。



#### <評価>

・水を使った遊びを始めた当初は、裸足になることや泥を触ることに対して抵抗を感じる幼児も

いたが、友達が楽しんでいる様子を見たり、保育者も一緒に裸足になって楽しんだりするこ

とで、クラス全員で泥遊びを楽しめるようになった。

・十分に泥遊びを楽しむ時間の確保をし、絵本『どろんこおそうじ』を読んだことで、泥遊びに対する関心も高まった。繰り返し遊ぶ中で、園庭の中央と端では土の種類が違い、水を含むと感触が変わることに気付き、おもしろがったり不思議がったりしながら、継続して遊びを楽しむ姿に繋がった。

#### 【5才児】『トンネルにきれいな水を流したい!』

○ 友だちと一緒に目的を持って遊ぶ楽しさを味わう。

○ 自分の考えたことを友達に話したり、友達の話を聞いたりして遊びを進める。

砂場で山をつくり、そこにトンネルを掘って水を流して遊んでいた。砂山に流れてくる水は泥水。そこでA児が「きれいな水を流したい。」と言った。

以前、砂場で温泉づくりをした時は、ブルーシートを敷いたことで砂が入ってこなかった。そのことを思い出したB児は、「トンネルにはシートが敷けないからどうしよう。」と話し、A児と一緒に考えた。

他にいいアイデアがないか考えていると、トイレを使ってコースを作って遊んだことを思い出した。トイレと一緒に置いてある塩ビパイプを見つけ、



トンネルに通すことにした。しかし、塩ビパイプは真っすぐで、トンネルは曲がっていたため、うまく通すことができず崩れてしまった。「パイプを通して、もう一回やってみよう。」「ぼくがパイプ持っておくから、A君は上に砂をかけてみて。」と、友達同士で協力する姿が見られた。

何度もつぶれてはまたつくりと、繰り返し挑戦し、やり方やコツがわかってきた様子だった。何度か繰り返していると、塩ビパイプが安定して、砂山の中に通すことができた。

そして、水を流してみると、うまく流れた。「やったー。きれいな水が流れてきた。」と二人で大喜びしていた。

その後、水を流し続けていると、塩ビパイプがズレて山が崩れてしまったが、「もう一度つくろう」と、何度も繰り返し遊んでいた。



#### <評価>

- ・4月当初、いろいろな遊びを転々としている子が多かったが、トンネルづくりに目覚め、砂場でトンネルを夢中でつくっていた。そこでふと以前にしていた温泉づくりを思い出し、「きれいな水を流したい」と『きれいな水』にこだわり、アイデアを出し合い、友達に伝えたり友達の話や考えを聞いたり、協力したりしながら、繰り返し遊ぶ姿につながった。
- ・子ども達同士で考えを出し合いながら、遊びを進められるように保育者も見守ることや、考えたことを試すことができるように環境を整えておくことで、思いが実現して、夢中になって遊んでいた。

#### 5. 研究の成果

- ・子どもの何気ない「言葉」や「こだわり」気づき、受けとめたり、共に遊んだり、見守ったり、共感したりする友達や保育者がいることで、やってみようとする意欲や、繰り返し試してみようとする力、繰り返し挑戦することで得られる達成感につながった。
- ・子どもが、「おもしろい」「やってみたい」と思える環境をつくったり、疑問に思ったことをすぐに試せるための素材を用意しておいたりするおくことの大切さを感じた。

#### 6. 今後の課題

各年齢の発達やその時期に育てたいことをふまえながら、保育者がひとりひとりの興味や関心を丁寧に見とることができる力量を付けることが大切であると感じた。

子どもが主体的に、夢中になって遊べる環境づくりや援助のあり方について、保育者間でしっかりと連携を深めながら、引き続き考えていきたいと思う。